

エックハルトのテオーシス思想における「離脱」と「神との協働」

田 島 照 久

一 はじめに

二〇一六年一二月に行われた第一五八回教父研究会例会の席上、谷隆一郎九州大学名誉教授から、「神化の道行き」と、その内的根拠をめぐって——『キリストの十字架と復活』の働きを愛智Ⅱ哲学として問い披く——というテーマのもとで提題があり、筆者は特定質問者の一人として以下の様な内容の質問をなした。

「わたしのうちでキリストが生きている」(ガラテア二・

二〇) というパウロの言葉に対して証聖者マクシモスは『難問集』(二〇七六A—B)で以下の様な解釈をなしている。

「もはやわたしが生きているのではなくて、わたしのうちでキリストが生きている」(ガラテア二・二〇)と
言う。しかし、こう言われたからとて、あなたたちは
心騒がせてはならない。なぜならば、わたしはその際、
自由の廃棄が起こると語っているのではなくて、むしろ
自然・本性に即した確かで揺るぎない姿、あるいは
意志的(グノーメー的)聴従(εξωνου)を語っている
からである。それによってわれわれは、「在ること」
を確固として保持し、似像が原型へと回復するよう
に現に動かされることを欲するであろう(谷隆一郎訳

『難問集』、知泉書館、二〇一五年、五四頁。

マクシモスは、「わたしのうちでキリストが生きている」というパウロの言葉が意志的聴従を語っていると、直前に「もはやわたしの意志するようにではなく、あなたの意志するようになしたまえ」（マタ二六・三九）という章句を引いて、「キリストが父への聴従を我々の模範として示している」と語っているが、「父なる神への聴従の範型」として「キリスト自身の信」がとらえられているとすれば、範型に倣うべき人間の側の「信」とは当然のこと「父なる神への聴従」ということになる。この場合マクシモスが「父なる神への」と語っていることが注目される。

「父」とは関係概念であり、父であることの存在は関係する当の他の者、すなわち「息」子から与えられる。それゆえに神が「父で在ること」は、「子で在ること」が関係的にもたらすこととなる。

「グノーミー的聴従」とは「父である神」への意志的聴従、すなわち「子として父に従うこと」と理解できるのだろうか。キリストを範型として、人間の「信」の在り方である「グノーミー的聴従」が「子として父に従うこと」と

理解することが可能であれば、西方ローマ・カトリック教会の伝統の中で現れたエックハルトの「魂の内における神の子の誕生」教説への通路が開かれることになるであろう。もしもそうであるならば、その直後の言葉「それによつてわれわれは（…）似像が原型へと回復するように現に動かされることを欲する」とはどういう事態を語るものであるのか、一つ目の質問は以上のものであった。

提題者にはもう一つ質問をなしたが、それは以下の様なものである。提題中に、つまり、神的エネルギー・プネウマの受容がなければ、意志的聴従も成立しえない。が、他方、意志的聴従という「善きかたち」（アレテー）があつてこそ、神的働きがすぐれて具体化（身体化）し生成してくると語られ、このことには、一見するところでは、ある種の循環ないし再帰性が存するとされた。「神的働きと人間的自由意志によるグノーミー的聴従」の循環性に関して、「神化という事態の原範型としてのキリスト」の「神人的エネルギー」の観点からこの循環性がどのように説明しうるのかということについてさらに説明を求めた。

これらの質問に対しての提題者の回答内容は『パトリステイカ』第二一号（本号）掲載の論文「人間的自然・本性

の神化とその成立根拠——十字架と復活の働きを愛智として問う——」で直接または間接に確認できるので参照されたい。

二 問題の所在

上記の質問事項に関連した問題を以下取り扱うことにしたい。取り扱う領域は、東方教会の証聖者マクシモス（六六二歿）より六〇〇年ほど時代が下った西方ローマ・カトリック教会で、マイスター・エックハルトと呼び慣わされたドミニコ会士エックハルト・フォン・ホーホハイム（Eckhart von Hochheim 一二六〇頃～一三二八年一月二八日）の思想領域である。本論で扱いたい問題とは以下のものである。

証聖者マクシモスの語った「意志的聴従」をキリストに倣った「子として父を知る」という意味に解した場合、この事態はエックハルトの思惟のコンテキストでは「魂の内における神の子の誕生」となる。その際エックハルトの思惟に特徴的であるのは、神の働きに対する人間の在り方、すなわちニュッサのグレゴリオスや証聖者マクシモスに見

られる神との協働 (cooperatio) という東方教父のテオシス思想に必須な構造契機が、エックハルトでは、その恩恵論理解から否定されていることである。

証聖者マクシモスの『難問集』で語られている「グノーメーの聴従」という事態をエックハルトの思惟文脈に即して「魂の内における神（『子』の誕生）」という事態として捉えたとき、エックハルトの語るこの「神との協働の否定」という問題を、まずはエックハルトの恩恵論の文脈に沿って追ったあと、さらに偽ディオニソスの否定神学の立場に立つ「離脱」教説から「神との協働」の問題を再度考えてみたいと思う。先ずは父に従うことが子の立場において初めて可能であるという「父・子という関係存在」に基づくエックハルトのテオシシ的言表である「魂の内における神の（『子』の誕生）教説（誕生教説）」を見ていくことにしたい。

三 「魂の内における神の『子』の誕生」の聖書上の典拠

エックハルトは、聖書箇所「主よ、私たちに父を示してください。そうすれば満足できます」（ヨハ一四・八）を

典拠として、人間に究極の目的である「永遠の生命」(vita aeterna) ないし「至福の満足」(sufficientia beatitudinis) がもたらされるのは、他ならない「父性的神性の認識」(cognitio deiatis paternae) に依るのであると語る。¹⁾

しかしさらに「子以外のだれも父を知る者はいない」(マター一・二七) という聖書箇所²⁾に依拠した上で、至福をもたらず「父性的神性の認識」がわたしたちにおいて成立するとすれば、それはわたしたちが父に対して子の関係に立つ以外にはないとした上で、子であるキリストが父を認識するように、すなわちキリストの信を範型として、わたしたちが父を認識するようになることを要請するのである。このことはまさしく人間が神の子として生まれるということ³⁾を意味すると語られる。子になること (fieri) は、聞くこと (audire) であり、聞くことは、生まれること (generari) であり、子として生まれた者はキリストが父から聞いたすべてのことを父から聞くこと⁴⁾になるとされるのである。

「子になること」は「聞くこと」すなわちマクシモスの「聴従」(ekpáthesis) に相当するであろう。エックハルトのこの文脈では、ロゴスそのものの全内実が顕わになるという意味で語られている。

「子以外のだれも父を知る者はいない」(マター一・二七) という父・子の関係は、「範型 (exemplar) 以外の何ものも像 (imago) を知るものではなく、像以外の何ものも範型を知るものはない」⁵⁾ という「範型論的關係」の中へと持ち込まれ、子の身分に関しては、「長子」(キリスト) と「養子」(人間) という厳然たる区別はありながらも、子であることの本質、すなわち「子性」(filialio, Sohnschaft) に関しては何ら異なるものはないと理解されていく。子の立場となつて父を知る、これが父性的神性の認識、父の認識の第一の在り方として、ここからドイツ語著作の中心テーマである「魂の内における神」(の子) の誕生」教説が説かれたのであると解釈されるのである。

四 功德・功績 (meritum) の沈黙としての 離脱 (abgescheidenheit)

「魂の内における神の(子の)誕生」というモチーフはまたラテン語著作『知恵の書注解』の中でも登場して行く。

「沈黙の静けさがすべてを包み、夜が速やかな歩みで半

ばに達したとき、あなたの全能の言葉は天の王座から地に下った」(知恵一八・一四―一五)、という旧約箇所をエックハルトは注釈して、沈黙の静けさがすべてのものを包まなければならぬのは、神である言葉が、精神のうちへと恩恵によって到来し、子が魂のうちで生まれるためであると説く。この「沈黙」の解釈がエックハルトの魂の離脱(abgescheidenheit)に関する教説に結び付けられて説かれてくるのである。なぜ沈黙の静けさがすべてのものを包まなければならないのか、その理由が以下のように説明される。

神が子としてわたしたちの内に生まれ、精神のうちへと到来するためには、「沈黙の静けさがすべてのものを包まなければ」ならないということである。魂は神の像に向けて(ad imaginem dei) (創られている)からである。像(imago)はしかしながら、その概念と固有性から、作動因と目的因との沈黙におけるある種の形相的産出(formalis productio)であり、これら(作動因と目的因と)は、本来的には、外部の被造物に関わるものであって、それらの噴出(ebullitio)を意味する。

しかし像(imago)は、形相的流出(formalis emanatio)のゆえに、本来的には沸騰(ebullitio)を意味するのである。⁽⁹⁾

魂の内に「神の子」が「誕生する」ためには「沈黙の静けさがすべてのものを包まなければ」ならないとされるが、その理由として子が父の像であり、魂は神の像に向けて創造されていることが挙げられている。どういうことであろうか。伝統的解釈に従えば、人間がそれへと向けて創られている「神の像」(imago dei)とは「父の像である子」(imago patris)であるとされるが、エックハルトもここではこうした伝統を踏まえて、像(imago)概念の有する固有性を問題としているのである。すなわち、像(imago)概念の有する固有性にしたがって、作動因と目的因との沈黙が神の子の誕生の条件になると説明されているのである。このエックハルトの論を理解するには、まずエックハルトの「像と産出」に関する一連の言表を概観する必要がある。

五 存在への産出の三つの段階

エックハルトは「ラテン語説教四九一三」の内像 (imago) について語り、そのなかで存在への産出には三つの段階があるとし、第一の段階に関してつぎのように語る。像とは本来的には、純粹で露なまっただき本質の単一の流出であり、形相的な注ぎ移しであつて、形而上学者は、作動因と目的因を度外視して考察するのであるが、この段階の産出は、最も内奥からの流出なのであり、それゆえ、すべての外的なものは沈黙し、排除されているのである、とされる。さらにこの産出はある種の生命 (vita) であつて、それ自身から、それ自身のうちにおいて膨張することであり、それ自身のうちで沸き立つ (bullire) ことである、とも語られる。

すなわち第一の段階の産出とは、父なる神からの子の誕生であり、外から働く作動因も、外から秩序づける目的因も介在しない、神最内奥の形相的注ぎ移しとして先の『知恵の書注解』引用にあつた「形相的産出」(formalis productio) に相当する。どこまでも神なる生命の煮え滾り、沸騰 (bullitio) が産出をもたらずのである。

つぎの段階の産出であるが、これは、作動因のもとにおける、かつ目的因への秩序づけにおける噴出 (ebullitio) で

あつて、この様態は二通りに分けられ、第二、第三段階の産出とされる。

第二段階の産出は、確かに自分自身によってあるものを生み出すのではあるが、しかし生み出すのは自分自身の内からではない場合であり、このように自分自身とは違う「何か他のものから」生み出す場合には、作成 (制作) (factio) と呼ばれ、それに対し、「無から」生み出す場合には創造 (creatio) として産出の第三の段階に分類されると語られ、アウグスティヌスの『善の本性』第二章および第二十六章、さらにアヴィケンナの『形而上学』第八卷第六章の冒頭が典拠として挙げられている。

まとめるならば、第一の段階の産出とは、神的ペルソナ間における生命の沸騰 (bullitio) としての「子の誕生」であり、第二の段階の産出とは、この世界においてなんらかの事物を生み出し、作る場合の作成 (制作) (factio) であり、この段階の産出ではアリストテレスの四原因すべてが動員されていることになる。第三の段階の産出は噴出 (ebullitio) としての「無からの創造」ということになる。

このうちで「像」が問題となるのは第一と第三の産出の場合であるが、第一の産出、すなわち父の像である子の誕

生では作動因と目的因は介在せず、第三の産出である無からの創造では神の内のアイデアが万物の像とされ、作動因と目的因がまさに主導的となる。

以上の理解を踏まえ、先の『知恵の書注解』のテキストに戻ることにしたい。「沈黙の静けさがすべてのものを包まなければならぬ」と語られたとき沈黙すべきものは、第一の段階の産出理解に照らして考えるならば、つまり形相的流出としての「父の像」である「子の誕生」に作動因や目的因が介在しないのであれば、父の像としての子がわたしたちの内に生まれ、精神の内へと到来するためには、われわれ人間の側でもあらゆる作動因や目的因は沈黙していなければならないことになる。

神における作動因と目的因の介在の否定は、神の万物創造が形相因によらず作動因や目的因によるのに対して、子の誕生はそれと区別されるからである。すなわち神における子の誕生が作動因や目的因によらないのであれば、魂の内においても、子の誕生にあたっては作動因と目的因の介在が、すなわち媒介 (medium) の一切が否定されることになるという論理である。

わたしたちにおいて作動因や目的因が沈黙している

場合にのみある種の本質的産出・沸騰 (bullitio) として、「神の子」、すなわち「父の像」が、神の像にむけて (in imaginem dei) 創られているわたしたちの魂の内に、生まれると説かれているのである。

わたしたちにおける目的因や作動因の沈黙とは、ある目的をもって何事かをなすというわたしたちの行為、つまりその「功德、功績」(meritum) の一切の無効性を語るものなのである。それが神のためであろうと、至福のためであろうとなんでであろうと、恩恵のためになすわたしたちの行為の一切が沈黙したときに、すなわち沈黙の静けさが魂を支配したとき、言い換えれば魂が離脱の場にあるときに、神的本性の一義的流出として、「神の子の誕生」が恩恵によって魂の内では生起するのであると説かれていることになる。

ただし注意を要することは、神的本性の一義的流出が生起する場、すなわち目的因や作動因の沈黙としての離脱という在り方は、神の恩恵の働きに対する人間の側の行為の「功德、功績」(meritum) の無効性を語るものであるということ、行為そのものの否定を意味するものでももちろんない。そうではなく、「ののために」をなす」という被

造的行為の在り方、すなわち、自己の存在を神に向向する者と立てた上で、自己の能力によって神の成聖の恩恵を獲得しようとする人間の在り方が恩恵の働きの障碍となるとされることである。

すなわち、神との関係においては、人間の側の行為の「功德」、功績〔meritum〕は一切無効であり、その「功德」、功績の働きのものがむしろ神の恩恵の働きの対して最大の障害となるとエックハルトは捉えるのである。働きが功績であるということは、働きそのものがある目的を持つてなされるということであり、目的に向かつてなされる行為は自己の外に目指すべき何故（*quae*）を持つ。それゆえ、子と共に生きる人は、何故ということなしに（*ane warumbe*）¹⁵生きたと語られるのである。

さて「功德」〔meritum〕と恩恵（*gratia*）の関係に関しては『ヨハネ福音書注解』の中で主題的に取り扱われており、¹⁶働きを受ける下位のものは働きかける上位のものから、その恩恵によって本質を受け取るが、これには二種類の事態があることされる。一つは、働きかける能動的なものとして働きを受ける受動的なものが質料ないし類において一致していない場合、働きを受けるものは、自らの本質すべてを上位

のものである働きかけるものから、自らの働きの「功德」、功績」なしに純粹な恩恵として受け取っていることである、¹⁷と説明される。

もし能動的な上位のものが不在の場合には、受動的な下位のものが恩恵により有しているすべての本質はこの下位のものに留まることはなく、瞬時に消滅するとされる。両者の関係は、光源が消滅すれば室内はすぐさま闇に包まれるという、光源と媒質である大気の例が用いられ説明されている。¹⁸すなわち、下位受動者は自らの働きの功德によらず上位のものの純粹な恩恵により、上位のものへの絶対依存の関係において、その本性の授受に与るのだとされている。

もう一つの事態は、神と人間との関係とは異なる関係の場合、能動的なものを受動的なものが、質料と類と種において一致する場合であり、受動的なものは、働きを受けながら働き、能動的なものは、働きながら働きを受けることになることされる。例えば、能動的なものは火は受動的なもの木材において熱を生じさせ、木材を熱において自分自身に同化するが、木材も自ら熱くなつていき、火という実体的形相を受容することができるまでに準備するという功德・

功績 (meritum) を持つ¹⁹⁾。被造物における生成、作成はどのように形相因も含めた四原因を挙げてのものであり、ここでは受動者の功德・功績 (meritum) が介在すると説明されている。

ここで、エックハルトの「恩恵論」をまとめておくことにしたい。神が被造物において働くすべてのことは恩恵 (gratia) であり、それは無償で (gratis) 与えられるものである。その理由は、神は「第一のもの」であり、「第一のもの」は『原因論』にあるように「それ自身によつて豊かなもの」であり、すべての人間に与える者であるが、いかなる人間からも何物も受け取ることがない者だからである²⁰⁾。下位受動者である被造物は、自らの働きの功德によらず上位のものとの純粋な恩恵により授受に与かる、という上位の作用者への絶対的依存関係にあるからである。以上の「恩恵論」からは次のような帰結が導き出されることになる。

いかなる被造的なものも、恩恵のもとにおいては、共に働くことはない。²¹⁾

六 「離脱」 (abgescheidenheit)

これ迄見てきたように、神の恩恵の働きに対して人間が取るべき在り方とは「功德、功績」を目指す行為の撥無、終熄となる。その意味で「神との協働」が否定されることになるのである。「魂の離脱」と名付けられた自己否定の在り方こそが最善の徳 (アレテー) とされるのである。証聖者マクシモスの説く「自由意志によるグノーメー的聴従」という「神との協働」が否定されているようにも思われる。しかし、「神との協働」(ovsepyia) という事態はテオシスを説くギリシア教父達の信にとつては不可欠の必須根本契機であった。

当然エックハルトもその重要性について理解していたはずである。「離脱」と「協働」という問題がエックハルトではどのように考えられているのか、この間の事情を考察することが本論攷の目的となる。

まずは「貧しみの説教」(Armutspredigt) と研究者の間で呼び慣わされている「ドイツ語説教五十二」で説かれている「精神における貧しさ」としてのラディカルな「離脱の在り方」がエックハルトの恩恵理解からはどのように解

積可能であるかを探ることにしたい。

(一) 恩恵と同意

「心の貧しい人たちは、幸いである、天国はその人たちのものである」(マタ五・三) という聖書箇所に対する説教「ドイツ語説教五十二」でエックハルトはこの「心の貧しい人たち」の「貧しさ」を「内なる貧しさ」と呼び「何も意志せず、何も知らず、何も持たない」こととする。この「無意志」、「無知」そして「無所有」はアウグステイヌスが『三位一体論』(第十四卷第七章)の中で述べている、魂における三位一体の似像である「意志」、「知解」、「記憶」に否定的対応をなすものであると考えられる。無から創造された被造物である人間にとって、神との出会いは、その三位一体的な似像を否定神学的に、すなわち否定を通して逆対応的に成就してはじめて可能であると考える所以であろう。「三つの貧しさ」の中で、特に本論旨に関係する「第一の貧しさ」と「第三の貧しさ」を見ていくことにしたい。「第一の貧しさ」である「意志における貧しさ」に關しては次に語られている。ここでは証聖者マクシモスの説く「自由意志によるグノーメー的聴従」という

「神との協働」の問題がテーマとなつている。エックハルトは次のように論を進めている。

最愛なる神の意志を満たそうとすることが自分の意志である、ということがその人にまだあるかぎり、このような人には、真の貧しさはないということになる、なぜならば、このような人は、神の意志を満たそうとする意志をまだ持つているからであつて、これは本当の貧しさではない。人が真に貧しさを持つと思うならば、その人は、いまだ存在していなかったときにそうあつたように、その被造的な意志にとらわれることなくあらねばならないからである⁽²³⁾と。

神の意志を満たそうとする意志の否定が語られているといえる。神の意志すら満たそうと思わない人が貧しき人であるとされ、この貧しさを「至高の貧しさ」(die hehste armut)と名づける⁽²⁴⁾と述べられている。すでに見たようにエックハルトの恩恵論の観点からは、神が被造物において働くところのすべてのものは恩恵(Gratia)であり、それは無償で(gratis)与えられるものである。その理由は、「第一のもの」である神は豊かさそのものであり、決して被造物の側の功德・功績(meritum)を必要とすることは

ないからである。ここではさらにその恩恵を受け取る側の「意志の同意」が問題とされているのである。神の意志に同意するわたしの意志も、被造的意志の最後の残滓として、功德・功績 (meritum) と見なされていることになる。エックハルトにおいては、伝統的な「自由意志による協働」という観点よりも、こうした自由意志に残存する我意の撥無という観点こそが問題とされるべき事柄であつたと見るこゝとが出来る。そのことはエックハルトの次のような痛烈な批判の言葉から明らかである。

何ものも意志することのない人こそ、貧しき人である
とわたしたちは語るのであるが、この意味を多くの人
たちは正しく理解していない。りつぱなことであると
思い、「その功績を」我が物にすることによつて (mit
eigenschaft)、贖罪の行や見かけだけの修練にはげんで
いるような一連の人たちがいる。このような人たちは
神の真理については何も知ることがないことを、神よ
憐れみたまえ。これらの人たちは外見からは聖人と呼
ばれるが、しかし内から見るならば愚かな口バである。²⁵⁾

(二) 恩恵と準備

「第三の貧しさ」として「極限の貧しさ」(diu naehste armnot) と銘打たれた「無所有の貧しさ」についてこれも恩恵論の観点から見えていくことにする。

人がすべての被造物と自分自身とに囚われることがなくとも、神がその人の内に業のためのある場を見出すことがまだあるならば、つまり、その人の内にまだそのような場があるかぎり、その人は極限の貧しさからするならば、けつして貧しいとはいえない²⁶⁾と語られる。

神が魂の内でも働こうとする場合、神自身がその働きの場となるほどに、人が神と神のわざすべてとに囚われていないとき、それを精神における貧しさというのであるとされ²⁷⁾る。

人が一切の被造物と自分自身に囚われなくなつたとしても、そのことが神の恩恵を受けるためである限り、それはなお恩恵のための準備の「場」を所有していることになる。恩恵論の観点からは、「神の働く場を所有すること」は「準備」という「功德・功績」に基づく「神との協働」と見なされることになる。人間がすべて捨て去つて神の働きを受けるにふさわしい無

の場となるということも、エックハルトの恩恵理解に照らすと「同意」と同じく「功德・功績」を我が物とする(eigenschaft) 自「の残滓と見なされ、克服すべき離脱の最後の段階として「極限の貧しさ」と名づけられたのである。しかしこのようなラディカルな言説を支える論拠とはどのようなものであるのだろうか。「準備」にまつわる問題は『知恵の書注解』の中で「神の働き」の観点から次のように論じられている。

神のみが自分自身のためにすべてのものに働きを及ぼすのであって、それは「箴言」(一六・四)の「主は御旨にそつてすべての事をされる」、と言われている通りである。神は、働きを及ぼすものうちにおいて、あるいは神がそのうちで働くものにおいて、理由や功德や準備を要求することはなく、むしろ神はそれらすべてを整え、その働きを受けるものに、そのための準備や功德を与えるのである。²⁸⁾

神の働きは神自身のためのものであり、働きかける被造物に対して理由や功德や準備を要求することはなく、神自ら

が準備や功德を与えるとされている。先のドイツ語の「貧しさの説教」で「神が魂の内でも働こうとする場合、神自身がその働きの場となる」と語られた内容に照応する。

こうした「神の恩恵の働き」に関するエックハルトの理解を成立せしめているものが「原因と結果の同一」という論理である。エックハルトはその主著『ヨハネ福音書注解』の中で「終極」と「始原」とが同一のところにおいては、つねに業はそれ自身のために存在すると語り、次のようにその理由を述べている。

あるいは、われわれは次のように言うべきであらう。すなわち、すべての神的なものには、とりわけ恩恵には、その恩恵がそれ自身のために存在すること、またそれ自身のゆえに存在することが属している、と。「…」というのは、終極と始原とが同一のところにおいては、つねに業はそれ自身のために存在するのであり、業は業のために存在するのであり、働きは働きのために存在するのである。しかしこれは、神に、神にのみ属するのであり、したがって神的なものであるかぎりでの神的なものに属するのである。それゆえに、

それらのものにおいては、花と実が同一なのである。
「私の花は実である」(シラ二四・二三)⁽²⁸⁾。

エックハルトは「創世記」冒頭の「初めに (in principio) 神は天と地を創造した」(創一・一)と、「ヨハネ福音書」の冒頭の記述「初めに (in principio) 言があった」(ヨハ一・一)を同じ「初め(始原)」として、神の内である永遠と受け取る。この始原である永遠を、神が在り、天地を創造し、父が子を生む、謂わばトリアーデ構造を有する「永遠の第一の単一なる今」(primum nunc simplex aeternitatis)と名づける。さらに、「わたしは初めであり、終わりである」(黙二一・一三)という聖書箇所に従い、この「始原」は「終極」であると理解する。その上で、「神は天地を創造した」という文の完了時制を踏まえ、神が過去のものとして創造したすべてのものは、始原の内において現在のものであり、神は創造しているのである、と始原の「現在性」と終極の「完了性」とを一つに重ね合わせるのである。

そして上記の引用のように、終極と始原が同一のところにおいては、つねに業はそれ自身のために存在するとするのであるとする。業の着手と業の完了が同一であるからで

ある。これは神的であるかぎりでの神的なものに属することであり、それらにおいては、花と実、すなわち原因と結果とが同一であると語られる。こうした理解が依拠する権威としてラテン語ウルガータ訳「私の花は実である」(シラ書二四・二三)が引かれている。

被造物は時間という生の尺度 (mensura) にあつては、「始原」としての初めにおいて準備をし、行為を開始する。そして行為が成就する「終極」を迎える。花の比喩で言えば初めに原因である開花があり、そして結実という結果である終わりを迎えるのである。

しかし神の業を永遠という尺度 (mensura) より見れば、始原と終極の同一は原因と結果の同一であり、神の一つの働きの内に着手と完成、開花と結実、そして準備と目的が同時に (gleichzeitig, 同永遠的に) あることになる。それ故に「被造物における神の働きそのものが目的であり、またそれは同時に、準備であつて、むしろそれは、その本性においては、準備というよりは、目的だということである」⁽²⁹⁾と語られている。こうしたエックハルトの恩恵論の有する「因果同一の論理」に即して人間の側の「準備」という「功德・功績」が先に見たように否定されることになるの

である。

われわれはここまで、エックハルトの恩恵論に基づいて説かれた、人間の側の「功德・功績の否定」が、神の業への「同意」や「準備」をも含むものであることを「貧しさの説教」(ドイツ語説教五二)で確認し、その神学上の根拠を永遠である「始原」の持つ「終極との同一性」に見ているエックハルトの理解を確認した。

その上でわれわれは本論攷の眼目である次のような最初に挙げた問に戻る。すなわちエックハルトの思惟においては、自らも語っているように「神との協働」は明確に否定されているように思われる。しかし、「神との協働」(conspirtio)という事態はテオーシスを説くギリシア教父達の信にとっては不可欠の必須根本契機であった。

当然エックハルトもその重要性について理解していたはずである。「神との協働」という問題、ひいては「神との協働の否定」という問題をエックハルトはどのような思惟の枠組みで捉えようとしているのか、この説明が本論攷の最後の課題となる。

七 「神との協働」(conspirtio)

エックハルトがエアフルトの修道院長時代に書かれた(一二九四年から一二九八年の間と推定される)最初のドイツ語著作と言われる『教導講話』(Die rede der underscheidung)の中でまさしく「離脱」と「神との協働」の問題が次のように問われている。

ここで質問が出されることになろう。「人間から自分自身および一切の働きというものが失われている場合に、そしてまた——内面的な豊かさに満ちあふれているがゆえに神について深く沈黙しうる人こそ、神についてもつともすばらしく語るのである、と聖ディオニシオスが語ったように——もろもろの像や働きの数々、讚美と感謝、あるいは人が活動できる何ものも消え去ってしまった場合に、一体どうすれば人は「神との」協働⁽¹⁾ということを持つことができるであろうか」と。

以下がエックハルト自身の答である。

答はこうである。「そのような人にも」適切で相応しいこととして一つの働きが残されている。それは自己自身を無にすることである。しかしながら、自分自身を無にし、小さきものにするということがどれほど大きなものだとしても、もし神がその人自身の内で、そのことを完成させることがなければ、それは欠陥に満ちたものにとどまるのである。謙虚ということも、神がその人自身と共に「協働すること」その人を謙虚にさせて初めて、十分に完全なものとなるのであり、そのときにおいてのみ、その人にとっても、この「謙虚という」徳にとっても十分に満足がゆくのであって、それより以前にはそうならないのである」と。⁽³²⁾

自己を無にするという自己否定の働きのうちにエックハルトは「神と人間の協働」を見ようとしているのである。神の恩恵の働きに対して、「同意」や「準備」も含め、人間の行為が「功德・功績」を「我が物とすること」(eigenschaft) である限り、「我が物とすること」の主体である自己が否定されなければならない。恩恵は如何なる

「功德・功績」も必要としないからである。この自己否定の在り方が「離脱」なのである。しかしこの自己否定の働きにこそ「神との協働」が必須であるとされているのである。⁽³³⁾

エックハルトにおけるテオーシスの言説、「魂の内における神(の子)の誕生」は、「魂の離脱」においてもたらされる成聖の恩恵であるが、この「魂の離脱」という自己否定は、神との協働によつて初めて完成するとされるのである。すなわち、エックハルトにおけるテオーシスは、神との協働の自己否定において成就するものであるとも理解できるのである。この観点から最後にエックハルトの次の言葉を覚えておくことにしたい。

神のためにあなた自身から完全に離れよ。そうすれば神はあなたのために自分自身から完全に離れるのである。この両者が共に離れるとき、そこにあるのはひとつの単純な一である。この一なるものにおいて、父はその子を最内奥の泉に生む。そこに聖霊が咲き出で、そこにひとつの意志が神の内に湧き出でる。この意志は魂に属するものである。意志がすべての被造物とす

すべての被造性に触れられずにあるかぎり、この意志は自由である。²⁴⁾

人間の自己否定（離脱）と神の自己否定（ケノーシス）の「協働」によって魂の内に「子の誕生」が生起し、神の内
に湧き出でた意志が「神の子」である魂のものとなる。す
べての被造物とすべての被造性に触れられることのないこ
の意志は自由であり、「神の子」である魂の有するこの意
志が、証聖者マクシモスの語った「父である神へのグノー
メー的聴従」を成就する担い手となるのである。

エックハルトのテオーシス思想は、偽ディオニュシオス
の否定神学の伝統、所謂否定の途（*via negativa*）を介して
東方教父のテオーシスの伝統を正当に継嗣するものである
ことがわかる。

（早稲田大学教授）

註

(1) Cf. *In Ioh.* n.680, LWIII, 594, 8-10. (なお、エックハルト

トのテキストは Meister Eckhart, Die deutschen und lateinischen Werke, hrsg. im Auftrage der Deutschen Forschungs-gemeinschaft, Stuttgart, 1936ff. を使用 (Deutsche Werke = DW, Lateinische Werke = LW)。説教番号、節番号はこれに従い、DW, LWの巻、頁、行を示した。なお日本語訳は、ドイツ語説教・論述は田島編訳岩波文庫「エックハルト説教集」一九九〇年を、またラテン語著作は中山善樹訳「エックハルト ラテン語著作集」I-V、知泉書館、二〇〇四—二〇一二年を使用した。訳文は適宜変更している。)

(2) Cf. *Ibid.* n.680, LWIII, 595, 1-3

(3) Cf. *In Ioh.* n.117, LWIII, 102, 9-11

(4) Cf. *Ibid.* n.641, LWIII, 557, 5-7

(5) Cf. *In Ioh.* n.26, LW III, 21, 1-2

(6) Vgl. *Pr6*, DWI, 109, 2-7: 父はその子を永遠の内です自身に等しく生む。「言は神と共にあつた。言は神であつた」(ヨハネ1・1)。それは子が父と同じ本性であつたといふことである。わたしはさらにつきぎのように言う。神はわたしの魂の中で子を生んだのだと。魂は神と共にいるだけではなく、また神は魂と共に等しくいるだけではなく魂の内にはないのであり、そして父はその子を魂の内、神が永遠の内です生むのと同じ仕方、別の仕方ではなく生むのである。神は、気に入ろうがいるまいが、そ

(4) 人間が自分自身と一切の事物とに区別されなごうにたゞ (ledic werde) とごうにたゞとあご」。Pr.53, DWII, 528, 5-6.: Swenne ich predige, so pflege ich ze sprecheanne von abegescheidenheit und daz der mensche ledic werde sin selbes und aller dinge.

(5) In Sap, n.283, LWII, 615, 10-616, 3: Adhuc autem sexto principatier ad hoc, ut deus filius in nobis nascatur, in mentem veniens, oportet quietum silentium continere omnia. Filius enim imago est patris, et anima ad imaginem dei. Imago autem ex sui ratione et proprietate est formalis quaedam productio in silentio causae efficientis et finalis, quae proprie creaturam extra respiciunt et significant ebullitionem. Imago autem, utpote formalis emanatio, sapit proprie bullitionem.

(10) パウロの「ローマの信徒への手紙」の箇所「神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たもの (conformes imaginis Filii sui) にしようとあらかじめ定められました。それは、御子が多くての兄弟の中で長子となられるためです」(八・二九) を典拠として、長子であるキリストを初子 (primogenitus) とし、多くの兄弟であるわれわれを養子の子 (filii in adoptionem filiorum) と解釈するアウグスティヌス以来の伝統がある。Cf. Augustinus, *Expositio quarundam propositionum ex epistula ad Romanos*, c. 48, n.

56, CSEL 84, 30, 22-31, 5.

(11) Cf. *Sermo XLIX*, 3, n.511, LWIV, 425, 14-426, 3

(12) Cf. *ibid.* n.511, LWIV, 426, 3-4

(13) Cf. *ibid.* n.511, LWIV, 426, 9-14

(14) 「神的ペルソナにおいては、形相の流出は或る種の噴出 (ebullitio) であり、これゆえに三つのペルソナは端的に、かゝ絶対的に一であるといふことである。それに対して被造物を産み出すことは、形相因ではなく、作動因の、かゝ目的因の様態における創造である」となっている (In Ioh. n.342, LWIII, 291, 7-10)。

(15) Vgl. Pr.5b, DWI, 91, 9-92, 3 の「なぜとごうことなしに生かご」とごう言説はエックハルトの「始原は同時に終極である」とごう「始原論」に神学的基礎を持っている。田島照久「ドイツ神秘思想における時間把握——マイスター・エックハルトの瞬間論」甚野・増田編『ヨーロッパ中世の時間意識』二〇一二年、知泉書館、一六七—一九二頁参照のこと。

(16) Cf. In Ioh. n.172, LW III, 142, 3-5

(17) Cf. *ibid.* n.182, LWIII, 150, 6-8

(18) Cf. *ibid.* n.182, LWIII, 150, 9-11

(19) Cf. *ibid.* n.182, LWIII, 150, 12-151, 2

(20) Cf. In Sap, n.272, LWII, 602, 4-6

(21) *Serm. XXV* n.255, LWIV, 233, 8: [...] nihil creatum cooperator

ad illam.

- (22) Vgl. *Ps* 52, DWII, 491, 4-7
(23) Vgl. *a.a.O.* DWII 491, 7-9
(24) Vgl. *a.a.O.* DWII, 499, 1-4
(25) *A.a.O.* DWII, 489, 1-6 : Ze dem êrsten sprechen wir, daz der si ein arm mensche, der nht enwil. Disen sin enverstânt effliche lute nht woi; daz sint die lute, die sich behaltent mit eigenschafft in penitencie und üzwendiger üebunge, daz die lute vür grôz ahtent. Des erbarne got, daz die lute alsô kleine bekennent der göttlichen wârhait! Dise menschen heizent heilic von den üzwendigen bilden; aber von innen sint sie esel, [...].
- (26) Vgl. *a.a.O.* DWII, 500, 3-6
(27) Vgl. *a.a.O.* DWII, 500, 7-501, 3
(28) Cf. *In Sap.* n.187, LWII, 523, 7-10 : [Deeimo septimo:] disponit deus, et ipse solus, omnia suaviter, quia ipse, et solus ipse, universa operatur propter semet ipsam, ut dicitur Prov. 16, et sic non requirit in his quae agit et in quibus agit quare aut meritum sive dispositionem, quin immo ipse disponit et dat dispositionem sive meritum passo.
- (29) *In Ioh.* n.177, LWIII, 145, 8-15 : Vel dicamus quod divinorum omnium, praecipue gratiae est, ut sit ipsa pro se ipsa et propter se ipsam, [...] Ubi enim finis et principium idem,

semper est opus propter se ipsum,opus propter opus, operari propter operari. Hoc autem dei et solius dei est et divinorum per consequens, in quantum divina sunt. Unde in ipsis flos et fructus idem, Eccii. 24: 'flores mei fructus'.

- (30) *In Sap.* n.188, LWII, 523
(31) *RdU* 23, DWY, 292, 1-5: Nû vrâge: wie sol man daz miewirken gehaben, dâ der mensche im selben und allen werken entwâllen ist und — als sant Dionysius sprach: der spricht aller scheneste von gote, der von der villie des inwendigen richtuomes allermeist kan von im geswigen — dâ sô ensinkent hilde und werk, der lop und der dank, oder swaz er gewirken môtte?
- (32) *RdU* 23, DWY, 292, 6-11 : Ein antwurt: êin werk blîbet im bilflichen und eigenfichen doch, daz ist: ein vernihten sin selbes. Doch ist daz vernihten und verkleinen niemer sô grôz sin selbes, got envolbringe ouch daz selbe in im selber, sô gebricht im. Danne ist diu dêmüticheit allerêrst genuoc volkomen, als got den menschen dêmütiget mit dem menschen selber, und dâ alleine genüget den menschen und ouch der tugent und nht ê.
- (33) 「離脱」が神への協働によるものである点に関して「わりの」では詳細に検討するところは出来ないが、結論的に言えば「離脱」とは神の「一性」に立つ「わりの」の意味

で神と共にあることを意味している。この観点から「神との協働」を考へる必要がある。

- (25) *Pr.5b DWI, 93, 6-94, 3*: Ganc din selbes alzemåle üz durch got, sô gât got alzemåle sin selbes üz durch dich. Dâ disin zwei üzgânt, swaz dâ blîbet, daz ist ein einvaltigez ein. In disem ein gebirt der vater sinen sun in dem innersten gequelle. Dâ bliejet üz der heilige geist, und dâ entspringet in gote ein wille, der behæret der sêle zuo. Die wîle der wille stât unberteret von allen créaturen und von aller geschaffenheit, so ist der wille vii.